令和5年度大阪府障がい児等療育支援事業
専門研修会

「こどもたちの育ちを支えるヒント！
楽しい毎日を過ごせるための支援」

NPO法人　アスペ・エルデの会　臨床統括ディレクター
石川道子

障がい児等療育支援事業の変遷

- 身体障がい（視力障がい、聴力障がいも含む）・知的障がいに関しては歴史がある→手帳制度、特別支援教育も整備されている。
- 精神障がいは子どもでは発症率が少ない、病状が安定していないこともあり、支援が確立していない。当然、教育の中の方法論も統一されていない。
- 現在、障がい児支援の中で大きな割合を占めているのは発達障がい。成人の制度利用率も増えてきている。

育ちの中での困難さ

- 発達障がいは「障がい」であることを理解されにくい→意欲や育て方の問題にされやすい。
- 支援を受けるためのコミュニケーション力や対人スキルの問題を持っている。家族の中でも問題が生じ、相互関係不調が起きやすい。
- 他の領域に比べ、日常生活動作や基本的な社会的習慣が定着しにくい。

発達障害がいについての知識を支援事業に活用する

- 発達障がいとは？
- 発達障がいの情報処理特性とそれから派生する特徴
- 各年代（乳児、幼児、学童、義務教育終了後、成人）の様子、問題となること
- 年齢・特性にあわせた支援―多様性を考慮
- 継続した支援の必要性

1）発達障がいって何？

- 理解が難しい理由は？
- 不器用さ（DCD）も障害ととらえよう

なかなか理解されにくいのはどうして？

- 合併している人が多い
- 年齢や経験によって状態が変化する
- 場面や人によって、様子がすごく変わる
- どこからか「障がい」でどこからが「障がいじゃない」のか境界がはっきりしていない

- 周囲の受け止め方も様々
- 対応の仕方が分からない

発達障がいに含まれる障害

ADHD 注意欠陥多動性障害
Atention Deficiet Hyperactivity Disorder

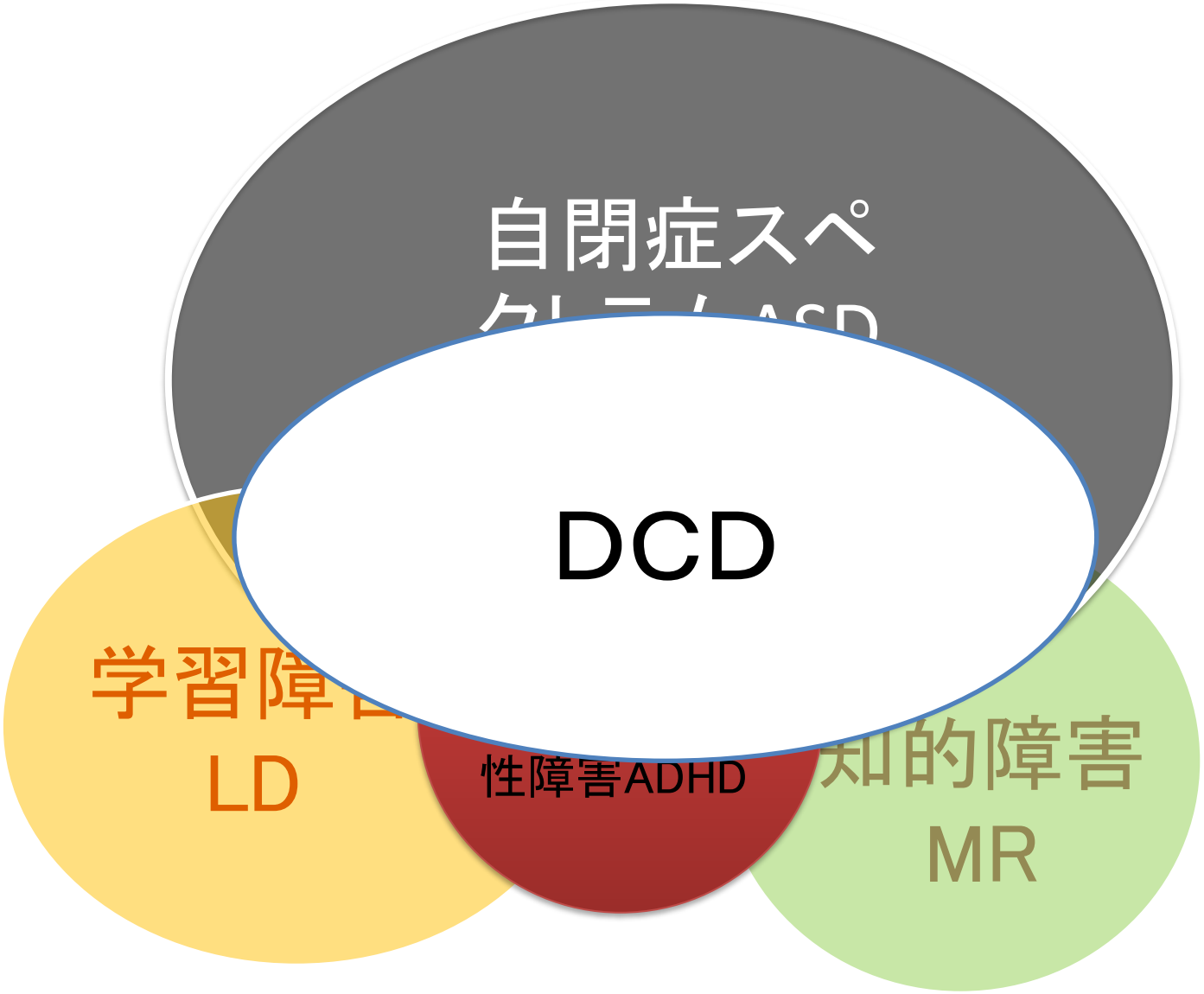
LD 学習障害
Learning Disorder

ASD 自閉症スペクトラム
Autism Spectrum Disorder

MR 軽度の知的障害、知的境界域
Mental Retardation

DCD 発達性協調運動障害
Developmental Coordination Disorder

発達障がいの関係図



年齢や環境や体験で目立つ行動が違う

① 発達障がいとは、定型発達と違う発達の経路をとるタイプの子の総称

② 発達の凸凹を示しやすいが変化することも多い

③ 合併している例が多く、それぞれの障害の特徴が目立たない

④ 幼児期は、言葉の遅れや多動が目立つ
⇒ADHD

⑤ 学齢期は学習の習得が出来ない⇒LD

⑥ 成人期は自立した社会参加が出来ていない
⇒ASD

最も知られていない発達障がい DCDについて

- 年齢相当の協調運動（粗大運動and/or微細運動)ができない
- 練習しても出来ない（中核群のDCD)場合と練習すればできる場合があるが、両者とも初めてのことはうまく出来ない。
- 複雑な協調運動になるほど、苦手さが目立つ
- 対人関係やコミュニケーションにも大きく影響
- やれないことがはっきりするので、自己評価が低くなる

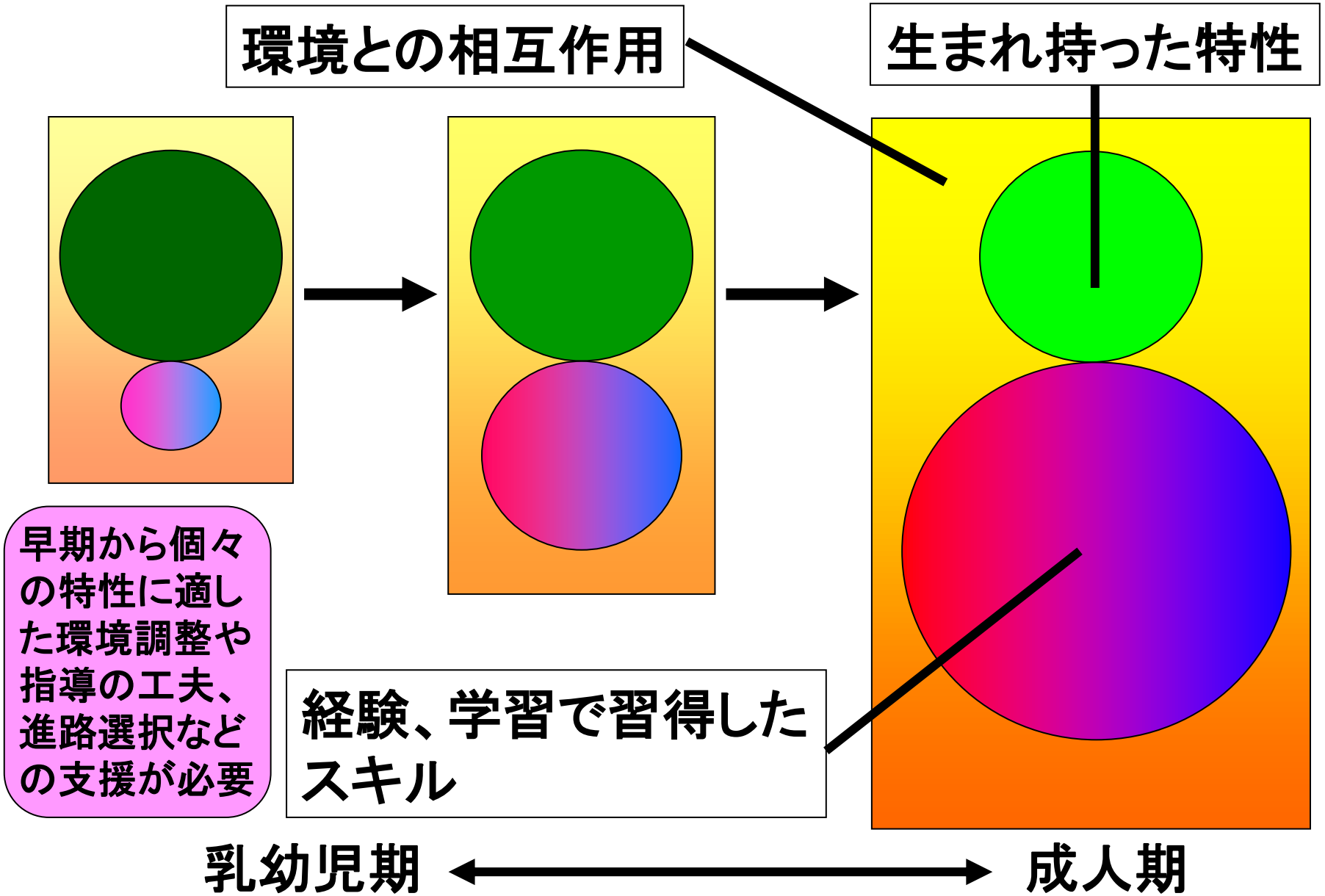
目立たないけど重要なDCD

- 書字障害、板書をうつすことが出来ない
- 着席の苦手さ
- 運動が複雑化したときに練習法が分からない、練習量が必要
- 日常生活動作の不完全さ
- 行動の不自然さ
- 片付けが出来ない、ものを落とす

↓

DCDは動けるための練習を続けないと、
就労時に問題になる

＜人の心理・発達・行動に影響を与える要因＞



2）自閉症スペクトラムの情報処理特性を知る

発達障害の情報処理特性を知っていると

- 習得が難しいことを予想できる
- 特性にあった教え方ができる
- 問題となる行動が発生するメカニズムを理解できる（状況、未学習、誤学習、対応の間違い）
- 本人が説明できない行動の理由や意味を周囲に説明してあげられる（実況中継・同時通訳機能）

自閉症スペクトラムの情報処理（認知）の特性

1. 視覚優位（はなしことばが苦手）
2. 細かく、パーツに注目しがち
3. 2つ以上の情報処理が困難
4. パターンが決まった物事が理解しやすい
5. 記憶がいい
6. 感覚過敏性
7. パニック（情報入力の停止）を起こしやすい

たとえば、視覚優位があると

- 見えないものが分かりにくい

はなしことば、この先起こること（見通し）、相手の考えていること、時間経過、自分の行動など

- 初めてのことが苦手、抵抗する

言葉だけだとイメージができないので不安になる⇒拒否

- 自分のみえるもので世界を理解しようとする（視点の転換ができない）

サリーとアン課題の不通過

☆モデルを見せる方が説明するより有効

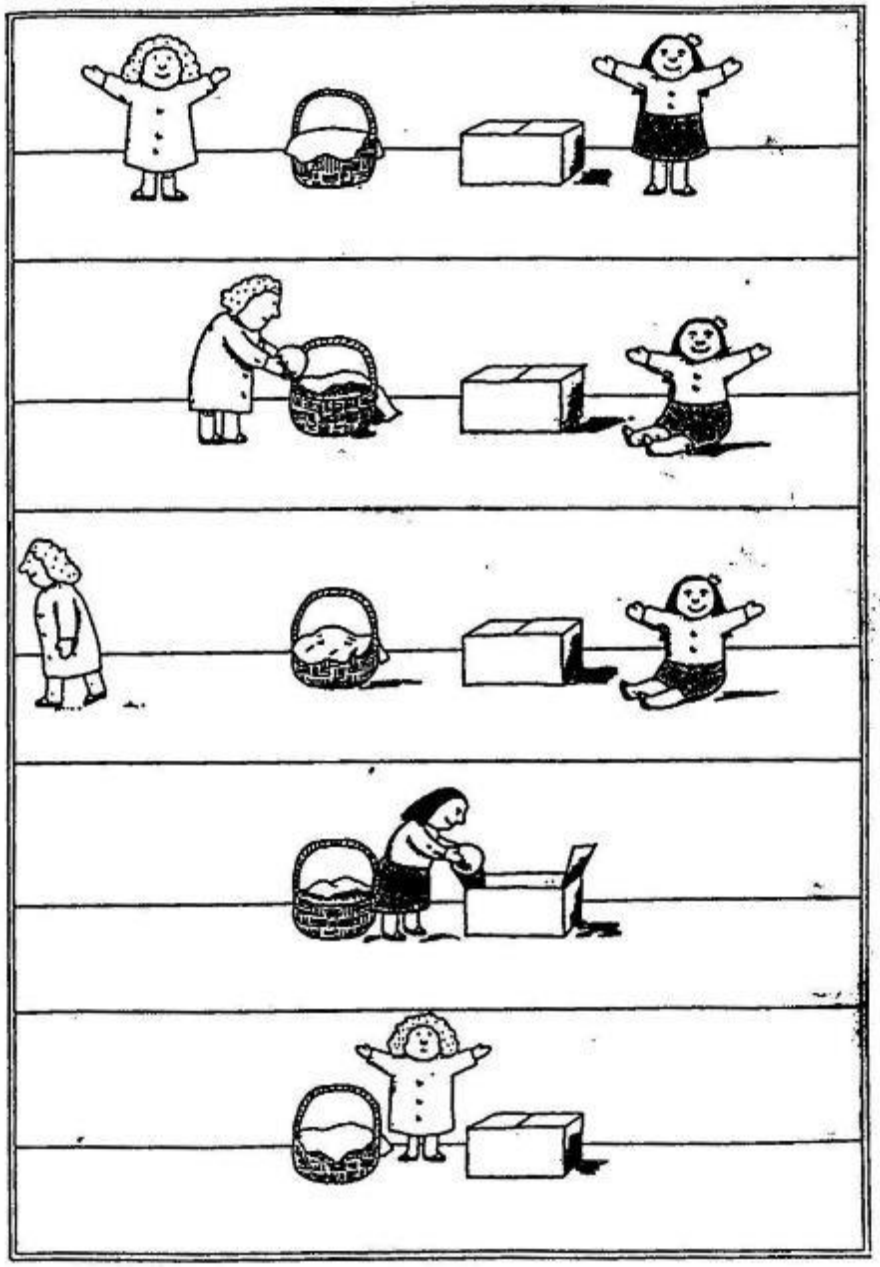


図 5.1　サリーとアン課題（画家 Axel Scheffler の許可により Frith：1989 a から転載）。

二つのことの同時処理が難しい

- 「〇〇しながら× ×する」は難しい

例：顔を見ながら話を聞く、本を読んでいるときに質問に答える、動いているときに周りの様子をみる

- 視覚優位と組み合わさると、視覚的な刺激があると話が聞けてないことが多い
- いくつもの指示をすると不完全な実行になる

☆指示は具体的に、一つの動作が終わってから次の指示をする

これは何の絵でしょう？

パーツ・細部に注目する傾向がある

- ざっくり全体にという理解より、細部まで厳密に把握しないと落ち着かない
- 他の人は気が付かない細部の違いやゆがみが気になる
- ことばも文脈よりも単語に注目しがち
- 記憶の良さと重なると、気になることが多いが、人にはわかってもらえない

（「そんな些細なこと、我慢しなさい」と言われる）

細部・パーツに着目することから派生すること

- 全体よりパーツに目がいきがち
- 人の情報処理が難しくなる
- 背景情報と処理しなくてはいけない情報(重要なこと)が分けにくい

★ **遠くに離れた方が人の行動の観察がしやすい**

パターンが決まったことが分かりやすいと

- パターンが崩れると混乱しやすい

  前と違う、自分が思い込んだのと違う、
  急な予定変更など

- いつもの通り、ルールから外れない状況が安心できる
- 同じパターンの行動を繰り返す（発達にはマイナス）

パニック（混乱）になりやすい

- 分かりやすいパニックと静かに混乱している場合まで、様々な形がある
- いつものように理解することができない
- 話しことば（特に強い感情が伴うもの）はマイナス刺激になる
- パニックは絶対終わりがある

集団ではさらに
行動のコントロールが困難になる

はなしことばが正確に伝わっていない
予想している反応が返ってこない

↓

大人が慌てる、焦る

↓

本人もパニックになる

↓

周囲も混乱

記憶がいい（特異な記憶の仕方）

- そのままコピーする記憶
- 写真的記憶（みたものそのままコピー）レコーダー的記憶（聞いたものそのままコピー）が優れている
- 行動やことばの社会的意味を理解していないことが多い
- 嫌な記憶も消去されずにいつまでも残る（フラッシュバックの材料となる）

感覚の過敏性

- 苦手な刺激→生活に支障
- 気になると苦手な程度 ⬆
- 選択的注意が困難
- 生きていくのに必要な生理的感覚が鈍くなる
- 感覚の刺激が過剰に入る→脳が疲れる
- 感覚の過敏性は、不安な時、集中できるものがない時に出現することが多い

3）各年齢で問題となること

子どもの状態をアセスメントするために考えなくてはいけないこと

現在の学校・園における状態

本人の特性

- 発達障害の有無
- 興味を持つこと
- 情動の安定
- 性別や体格

家庭の状況

- 要支援家庭
- 学校への信頼感の有無

環境・経験

- 本人にあった環境
- 幼児期に適切な支援を受けているか

習得していくものも異なる

- **誤学習**と**未学習**の問題
- 情報処理特性から**習得しやすいもの**と**習得されにくいもの**が出現。
- ASDだと

【習得しやすいもの】

視覚的にとらえられる

同じパターンで繰り返す（状況や相手によって変わらない）

短い時間で理解できる

【習得しにくいもの】

人が関係してくること

長時間持続しなくてはいけない

強制されたが結局意味不明のもの

- 年齢が低いと未学習が多く、年齢が高くなるほど誤学習が多くなる

①乳幼児期

乳幼児期の発達をまとめると

生きる

- 食べる
- 寝る
- 排せつする

できる

- 移動
- 物を操作
- 自分で生活動作をする
- ことばを話す

楽しむ

- 遊ぶ
- 人とやり取り
- 変化させる

大人が助ける

集団を通してみると

基準となる同年齢集団の中で違和感を感じる何かがある

出来るようになるのが遅い（場合によっては早すぎる）

周囲と違うことをしている

いつも同じ行動を繰り返している

指示に従うことができない

いい時と悪い時が極端

急に泣き出す。原因がわからない・・・・・

幼児期の集団生活で発達障害児が習得しにくいこと

- みんなと遊ぶと楽しい、自分で独占するよりいいかも
- おなかがすいたので給食自体（メニューではない）が楽しみ
- お友達と仲良くしたいのでけんかを避けるかすぐに謝ることが必要だな
- 注意されたら、すぐにやめる
- 自分の体験や気持ちを相手がわかりやすいように表現する
- 周囲の雑音があっても先生の声を聞き取る
- 次を予想して行動する
- 疲れたら休む、のどが乾いたらお茶を飲む（園のルールを守って）
- 待たせている人がいたら急ぐ、嫌な思いをさせたら謝る
- わからないときには先生やお友達に聞く（できればタイミングを見計らって）

幼児期に習得できるはずのことができずに困ること（親からの訴え　ベスト3）

会話ができる

- 聞いても答えないので、本人の気持ちがわからない
- 本人から状況を聞き出そうと思っても何があったか把握できない
- 気持ちが通じ合わないのでイライラする

集団行動がとれる（保育園や幼稚園）

- 課題をやらないと先生から苦情を言われる
- 参加していないのを保育参観で目撃してがっかりした
- 先生の指示を聞いていないので行動ができない

お友達とうまく遊ぶ

- お迎えに行くと一人で遊んでいる
- 友達に手をあげることが多く謝ることばかり、
- 間に入りたがっているが入れない

②学齢期

学童期に習得できずに困ること（無理やりベスト3）

①毎日学校に通う・・・・生活リズムがくずれている、身体症状があるので無理させられない

②宿題を毎日する、学習したことを覚えている、生活に使える・・・・やらせようとすると親子喧嘩になる、やった課題を覚えていない、時間がすごくかかる、勉強は自分のためといってもわかっていない

③友達関係をうまくこなせる・・・・いじめられている、友達に手を出す、一人孤立している、うまくいっていないことを、本人は自覚していない、先生に話すがそんなことはないと否定される

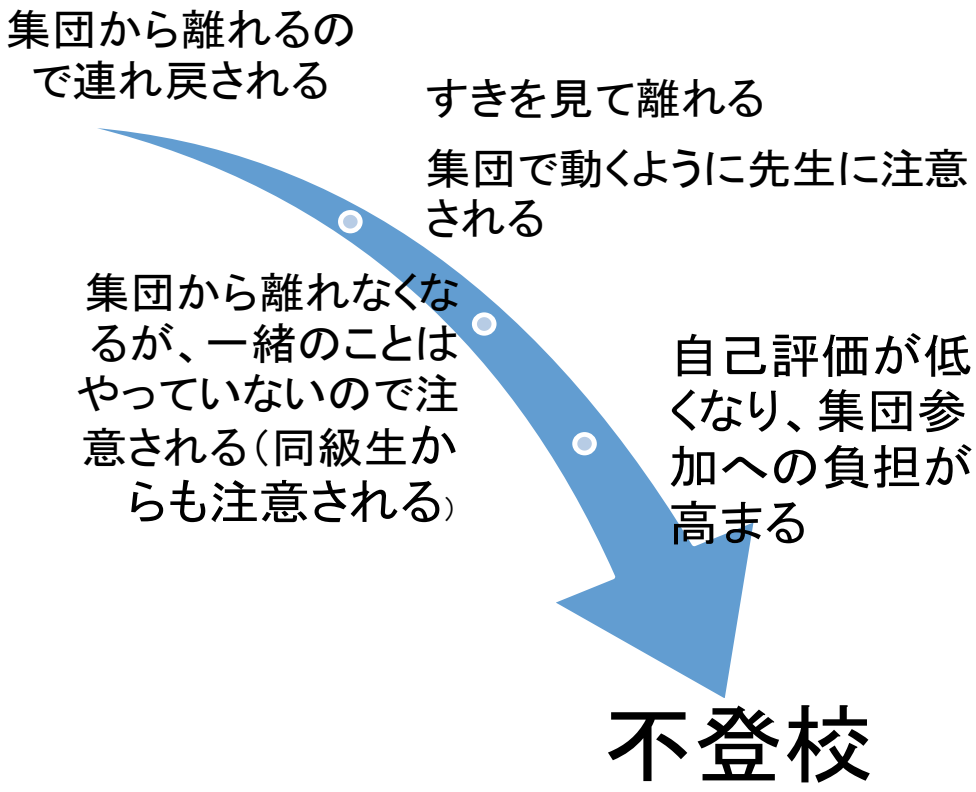
学校生活を送る上で不利になる条件

- 長時間の座位保持が苦手
- 書字障害が存在する
- 運動が得意ではない
- 全体指示を聞き損なう
- 衝動的な動きでミスが多い
- 行動のテンポが遅れる
- 偏食がある場合は、給食が苦痛
- 集団の中での地位が低い

通常学級の学習カリキュラムはASDをLDに育てる

- 通常学級のプログラムはASD用ではない
- 速度が合っていない
- 習得できなかった場合に補習はない
- 興味のある教材が少ない
- これで終わりが分かりにくく、新しいことが次々出てくる
- 複雑すぎる（複数の目的、手順）

学校から気持ちが遠ざかる



学校で問題行動とされること

- 本人にとっては、適応するための行動

  例　姿勢が悪い、休憩時間を一人で過ごす、急に思いついた行動

- パニック及びパニックの回避行動

  例　口にものをくわえる、教室から飛び出す
  　　机の下にもぐる
  　　友達に手を出す、暴言、「死にたい」

- 間違った学習をしてしまった行動
- 自然に獲得できなかった行動

  例　ノートをとらない、整理整頓ができない
  　　忘れ物が多い

高校の先生が気になる生徒

- 態度
  - 落ち着きがない
  - 人と違う行動（極端にまじめ、礼儀正しすぎる、急に大きな声を出すなど）
  - こだわりが強い
  - 感情の起伏が激しい
- 運動
  - 姿勢が保てない
  - 身体の動きがぎこちない
  - 協調運動ができない
  - 筋力が明らかに弱い
  - 文字が異常に雑
- 対人関係・コミュニケーション
  - 会話がかみ合わない
  - 自分の興味のあることを一方的に喋り続ける。
  - 発言した言葉をそのままとる
  - 視覚優位で耳からの情報が入らない
  - 相手の気持ちを理解して、自分の言動を抑える事ができない
  - 空気が読めない
- 対物
  - よく物をなくす（整理ができない）
  - 忘れ物が多い

子どものうちに問題となっているのは本人の困り感というより、周囲の困り感

- 診断を受けた後、本人が自己理解できる時期まで時間と適切な支援が必要。
- 自分の行動を振り返ることができるスキルが一番習得できにくいスキルかも。
- 家族の理解→集団生活での周囲の理解→地域社会の理解→正確な自己理解の順のような気がします。現状は、地域社会の理解が今一つ。

③成人期

大人になって困っていること

- 大学や専門学校へ進学後、不適応を起こした
- 就活がうまくいかない
- 就労が継続しない
- 社会参加ができていない

↓

SOSが出せていない
サポートする人がいない
自己理解ができていない

「困っていることはない！！」

- 目の前のことを“やるのが大変だ”“やるのが無理かも”と感じることはあるが、それが“困った”ことではない
- 「困る」という言葉の意味理解が違う

理由　ことばの自分ルールの使い方、感情にまつわる言語の使用が苦手なことに加え、可視化できない、量化できないことば

- 聞いた時には困っていない
- 話すこと自体が面倒（＝労力が必要）

成人　自立した生活が要求される

- 就労の失敗
- 家事労働ができない
- 計画的な生活ができない
- 犯罪に巻き込まれやすい
- 健康管理ができない
- ひきこもりなど社会参加していない状態

④時期にかかわらず問題が起きやすいこと

年齢に関わらずこんなことが起こりがち（発達障がいあるある）→その対応策を考える（＝味方になる）

①新しい環境になった時に目立ちやすい
②同年齢での集団行動がうまくとれない
③ことばによる情報伝達がうまくいかない
④パニック時には適応行動がとれなくなる
⑤気持ちの切り替えが難しい

①新しい環境になったとき目立つ

- 環境の変化は発達レベルではなく、年齢で決められている
- 発達障害と診断される子供たちの共通点の一つは、環境へ適応する力の弱さがある
- 適応するまでに通常より時間がかかる
- 今まで習得したことに固執しやすい（新しいことを抵抗する）

就学後に要求されること

- 着席時間　最低45分は座ること
- 時間割　授業、放課、給食とみんなと一緒に動くこと
- 連絡帳を書く
- 指示に従う　課題を拒否しない、注意したら辞める
- 宿題をやってくる、
- 授業内容を理解すること、ノートに書く
- 道具の管理　道具箱を自分の机の中に入れ、管理する
- 忘れ物をしない
- 空間　特別教室、運動場など広い
- 周囲の人間　初めて見る人がたくさんいる
- 先生が見ていない時間帯がある

園と学校で変化することがら

園

- 机の配置が向い合せが多い
- おもちゃがある
- 外遊び時間が多い
- 課題をしなくても次の日は困らない
- 先生の目が届いている
- 排泄などは先生が介助
- 登園方法は多様

就学後

- 全員前向き
- 遊び道具が少ない
- 学習は積み重ね。習得していないと次の段階が分からない
- 休み時間は基本は先生がいない
- 身辺面は自立していると思われている
- 自分で歩いて登校。分団登校が多い

通常学級で快適に生活できるために必要なスキル

- 字や数字が読める
- 字や数字が書ける
- ４５分着席できる
- 指示に従う（しばらく黙っている、止まっていることを含む）
- 曜日や時間が分かる
- 道具が片づけられる
- 排泄や着替えや食事が一人でできる
- 友達のやることを見ている
- 一番にならなくても怒らない
- 順番を守る
- １人で歩いて登校できる
- 間違いを指摘されてもパニックにならない
- ・・・・

まとめ

就学（環境が変わる）時に何が起こるか？

- 以前のスキルをかたくなに使おうとする
- 指示がきけないと誤学習が多くなる
- 学校が特性を把握していないと逆効果の対応となる
- 混乱すると学習する力が阻害される
- 学習の基礎を身に付けそこなう
- 学校が嫌いな場所になる
- 周囲の評価が低くなり、成長すると自己評価が低くなる

ライフサイクルに存在する“切れ目”

- 幼稚園・保育園に就園（初めての集団生活）
- 就学（小学校入学）
- 小学校から中学校に進学
- 中学校から高等教育へ
- 就労
- 一人暮らし
- 結婚・子育て

↓

この時期には、手厚い支援と連続性を必要とする

集団からはずれる理由とその対処

- 一斉指示の聞きそこない⇨視覚補助
- 複数の人の中にいると「人がパーツで見えやすい」⇨集団から離れたところで観察させる
- 複数の人がいるとモデルにする人が決められない⇨先生をモデルに
- 初めてのことは不安が強く情報が取れない⇨一回目は観察

教室で先生の話を聞くこと

パニックになるとうまく行動できない

- パニックなのに、周囲も自分も認識できていないことが多い⇒パニックの対応を
- パニック時はいつもの理解や実行能力が出来なくなっている⇒パニック時は何かを教えることを断念する
- 周囲の状況を入力できなくなっている、被害的な受け取り方をする⇒一人で落ち着ける場所を確保

パニックになりやすい場面

- 状況がよく分からず、混乱

例　：人が大勢動いている（教室移動、自由時間、給食の準備、帰りの会、外遊びなど）、グループ活動、予定が急に変更、いつもと違った活動（誕生日会、運動会、行事など）

- 長時間頑張って疲労に負ける

例　：着席、不得意な課題（書くこと、聞くとこなど）を続ける、苦手な人と一緒にいる、叱責など

- 生理的に不快な状態が続く

例　：暑さ、空腹、乾き、騒音、眠いなど

- 要求されている課題が出来ない

例　：学習課題、宿題、友達と仲良くするなど

混乱した（パニック）時に周囲が落ちついて対処すること

- 社会的なスキルを身に着けていても、パニック時の行動は変化しない。
- パニック状態を目撃する人は少ない方がよい。対応するのは慣れている人。
- その場で説得をしようと思わないで、パニックの収まった後に提案する。提案を検討する時間が必要。

練習するのに最も適している場所は家庭！

家庭では教えることができない（要支援家庭など）あるいは集団の中での対応を教える場合は学校

4）発達障がいと共生できる社会を目指して

未診断例の支援の困難さ

大人になるまでに経験したことと置かれている現状

経験してきたこと

- 集団生活でいい体験をしていない
- 理解してくれた大人がいない
- 同級生に劣等感がある（自分の意見を主張できない）
- いつももっと頑張れと要求されている感じ
- 指示されたことがうまくできない
- 不登校

現状

- 非社会的・閉鎖的
- 実家との折り合いが悪い
- 経済的に不安定（安定した就労ができていない）
- 精神・身体的に治療が必要
- 学校（先生）に対してマイナスの感情をいだいている
- 生活スキルが身についていない（清潔、健康を保つ、物の管理、約束を守る）

義務教育は発達障害児の未来を分ける

- 学校生活に参加していることで学ぶことは多い
- 誤学習を防ぐための工夫
- 長期にわたる不登校は、社会性だけではなく、身体機能を損なう（睡眠障害、生活習慣病、腰痛などの二次障害）可能性が高い
- 社会参加しやすい環境の用意

例として「友達とのトラブルから学ぶ」

定型タイプの理解

- 相手の立場で考えることが出来る
- 説明されなくても、自分で気が付く
- その場の解決とその後の相手との関係、周囲の雰囲気など、多軸的な考えができる
- 自分は悪くないと思っても、謝ることはできる

ASDの理解

- 自分の受けた被害の視点からしか理解できない（相手の視点に立てない）
- 説明されても、自分が非難されていると理解
- 対立場面で混乱しているので、理解できない
- 謝罪は自分が納得してからなのですごく時間がかかる

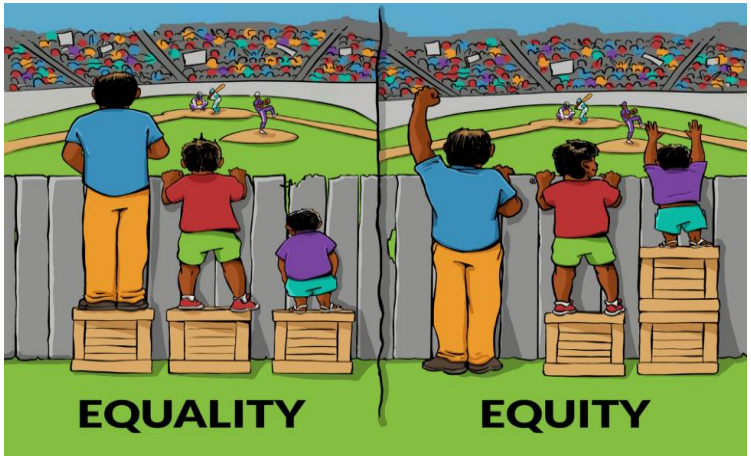
義務教育の中の合理的配慮

- みんなと同一課題を配慮を受けて実行できるようにすること？
- 評価が絡むと、周囲に不公平感を感じさせることになる
- 個人に合った環境、教材、授業内容を要求する権利ではないのだろうか？

合理的配慮を説明するイラスト

【疑問点】

そもそも野球を見たいのだろうか？



発達障害に対する合理的配慮とは？

情報処理特性があるので、習得できることが違う

学習の習得以外に、+習得しなければいけないことがあるので、それへの支援が合理的配慮ではないだろうか？

習得するための教え方の工夫も必要

+習得しなければいけないこととは

①対人関係の練習→集団生活への参加についても

②感情のコントロール

③自己理解

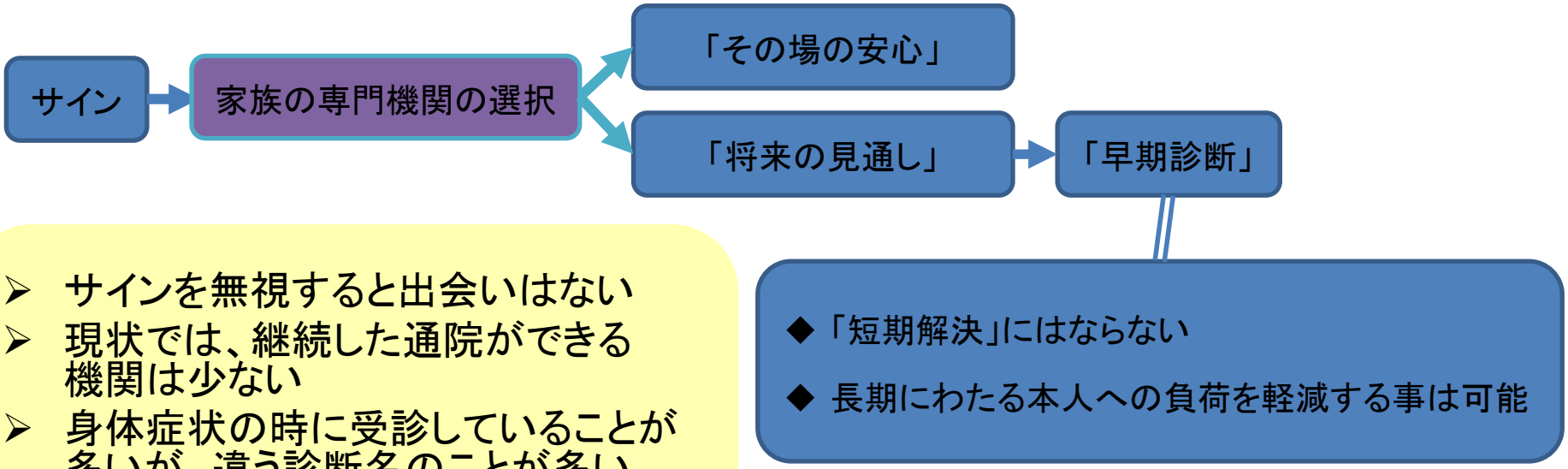
成人期に適応した生活を送るために必要なこと

- 他人に助けてもらうことを拒否しない
- 正しい自己理解が出来ている
（少なくともしようとしている）
- 日常生活レベルが大人としての自立度である
- 注意された、非難された時の行動が社会的に許容される範囲
- 適度な休憩や気分転換をできること
- 自分を出せる場所があること

学校生活で習得してほしいことを最低目標にする

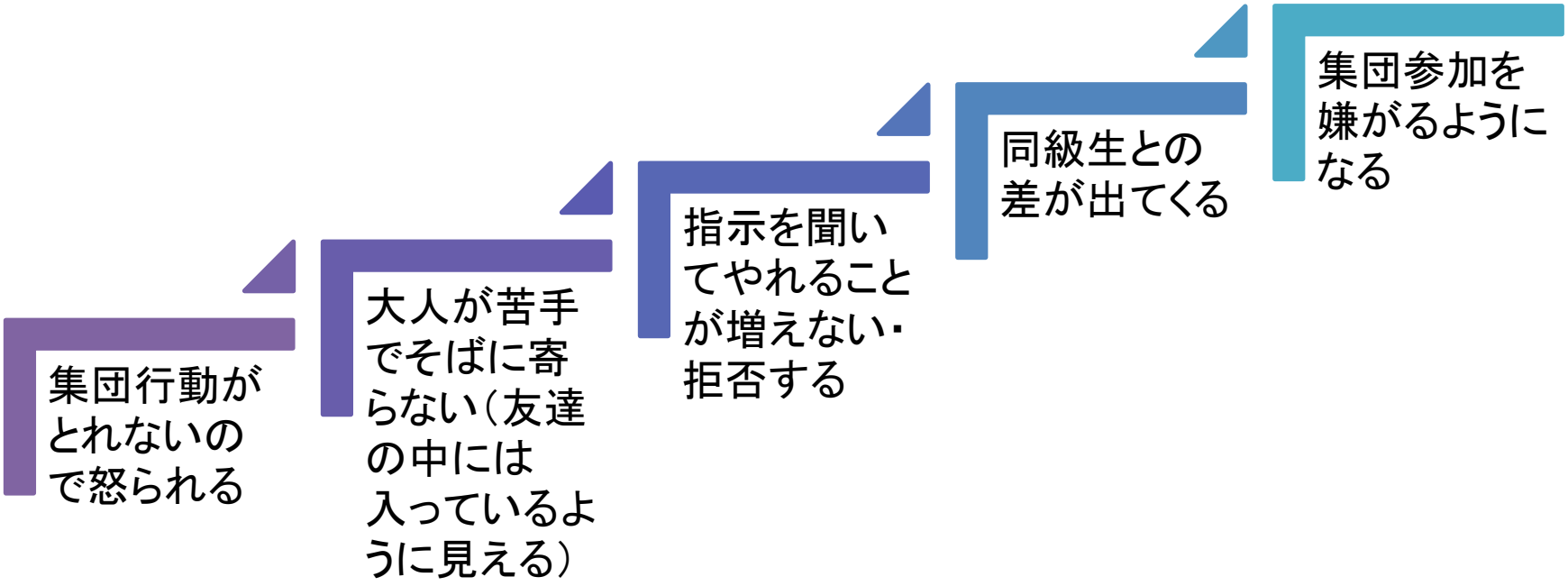
- 年齢相当の学力⇒文字情報はわかりやすい、計算は必要
- 同級生と楽しく生活する⇒他人（複数）の中で一定時間暮らすことになれる
- 対人関係やコミュニケーションの向上⇒人とかかわるとなんかいいことある
- 集団行動がとれるように⇒どんな指示だと実行しやすいかがわかる
- 授業をきちんと受ける⇒援助の求め方や休憩の取り方の学習もふくめ、過ごせる環境や時間を増やす

専門機関との出会い



- サインを無視すると出会いはない
- 現状では、継続した通院ができる機関は少ない
- 身体症状の時に受診していることが多いが、違う診断名のことが多い。
- 身体症状の出現時期は、本人の自己理解が進んでいない時期。

ASDの社会性の発達（誤学習例）



幼児期に取り組んでおきたいこと

- 家庭外の大人と信頼関係をもつこと
- 指示に従って行動するとうまく生活できることに気が付かせること
- パニック時の害のない過ごし方を学習
- 周囲に人がいても安定して行動できること

↓

本人の特性と現状のアセスメントが不可欠

結局、支援をしていくのに必要なスキルとは？

- 発達障がいの幅広い知識
- 子どもに成功体験を体験させる実践力
- 社会資源の情報
- 保護者に伝えるコミュニケーション力
- Teamでかかわることができるソーシャルスキル

https://www.instagram.com/hattatsu.hoiku.gakkou/

https://www.instagram.com/hattatsu.hoiku.gakkou/

限られた時間の講演では話せない「発達障害あるある」
をINSTAGRAMで配信しています。
興味のある方は、QRコードかまたは下のサイトから。